

吉川英梨

突然ですがみなさん、『ゾンビ』はお好きですか……？

いまやすっかりホラーコンテンツの定番アイコンになっているゾンビですが、この度、私も『感染捜査』（光文社、5月26日発売）という作品で、ゾンビモノにチャレンジいたしました。

普段ならこのエッセイで他作に触れることはないのですが、本作、警視庁の女刑事と元特殊警備隊員の海上保安官が主人公。本作執筆にあたってたくさんの海上保安官の方にご協力いただきましたので、発売を記念して今回のみ『感染捜査ノート』とさせていただきますと思います。

そもそも私はスプラッター系

「ゾンビモノは密室が盛り上がる」話聞き「船だ！」

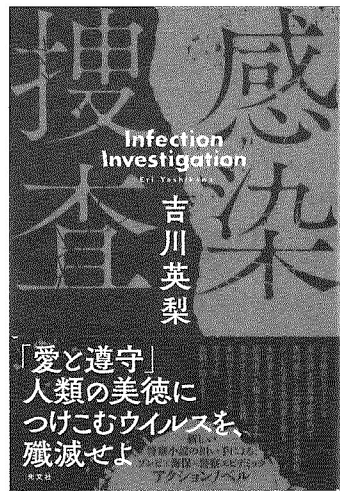
映画があまり好きではなく、ゾンビモノも敬遠していたのですが、海外ドラマ『ウォーキングデッド』で、ゾンビモノが持つ極限の人間ドラマに魅せられ「いつか私も書いてみたいな」と思うようになりました。私が書くなら「警察×ゾンビ」だと思って企画を温めていたところ、「ゾンビモノは密室が盛り上がる」という話を聞いて「船だ！」と思いつき、一瞬で「海保だ！」とひらめきました。

ゾンビと戦う警察官を書ける小説家はたくさんいますが、ここに海上保安官を加えたら、いま書ける作家は私しかいないんじゃないかと勝手に燃え上がり、企画もすんなり光文社で通って早速、執筆開始です。

舞台は2020年5月、コロナ禍がなかったという架空設定の東京オリンピック直前の日本。

主人公の天城由羽は警視庁東京湾岸署の刑事。違法薬物の瀬取り事件を追っていますが、そ

新刊の『感染捜査』



のさなか、海上保安官・来栖光と出会います。この男がまた謎だらけでどう見ても瀬取りを先導していたようにしか見えない。そこで由羽はご近所さんの東京海上保安部で来栖光の情報を求めるも、ここの海上保安官たちもどうも様子がおかしい……

……。

そのさなか、管内のレストランの貸し切りパーティで親族同士が互いを食い合うという凄惨な殺人事件が発生。由羽は現場に急行する——。

というのが作品の導入です。その後、舞台が豪華客船にうつり、海上保安官と警察官が豪華客船という密室の中でゾンビと死闘を繰り広げるという展開になっていきます。

作品執筆に際しまして、ダイヤモンドプリンセス号の対応にあたった横浜海上保安部、作品にも登場する東京海上保安部、巡視船ぶこうの特別警備隊の方々、そして五管本部OBの方にもお話を伺いました。みなさんのおかげでリアリティある（い

や、ゾンビが出てくる時点で全くリアリティはないのですが）生きるか死ぬかの究極の人間ドラマを描くことができたと思います。

『海蝶』で取り上げた『救難』は目の前で溺れている人を助けるというある意味シンプルな任務を描いています。まっすぐ正義仁愛を扱える作品ですが、『感染捜査』で取り上げるのは『警備』。こちらは治安維持の側面が強く、場合によっては『人を排除』せねばならない辛い側面があると思います。

感染を広げないために感染者を殺さねばならない、その極限状態に置かれた主人公・来栖光が「こんなことをするために海上保安官になったんじゃない」と男泣きするシーンがあります。

『海蝶』とはまた違った面で胸を打つ作品になっていると思いますので、手に取っていただければ幸いです。

（つづく）

海保の協力多大ですので今回だけ『感染捜査ノート』に